324
185

# 和譯金剛經註解

324-185

# 序文

夫殘習離言、佛心は非思量なりと、非思量是れ則ち諸佛諸聖の心體なり、世尊佛空生は赤心片々人をして赤肉團上に此眞人を獲得せしめんが爲めに此經を說けり、人は言はむ非思量の處思量を絕す佛は第二義門の上に下りて緣起の相の中に本性一實の理體を顯示せり、故に第一義は緣起の中に實在すべしと、或は然らん、固より第一義は緣起の中にて顯見せられん、然れども諸佛諸聖の心體は天も載くことを得ず虛空も收むることを得ず地も載せることを得ざるものなり、然れば則ち諸佛諸聖の心體は何ぞ緣起の中にのみ實在せん、須らく知るべし第一義は現象界にも見られ得べく、又非現象界の止揚にも見られ得べし之にて佛身は法界に充滿する道理を



明治
43. 5. 31
交内

識得せん。[illegible]
問ふ佛身は法界に充滿すと、然れば若し道道理を築着せば柱杖子忽ち龍と化して乾坤を呑却することと有らん其勢の奔逸絶塵なる當る者は皆碎け觸る者は皆毒氣に醉はされなん然れども夫程の者も人の彼を識得することなくんば第一義は作麼何の處にか有る。[illegible]
答ふ第一義の正當面は直に星流れて電捲く此間の消息は躍として追ひ難し卽ち第一義諦が十方虛空を築着する時は眼を以て緣ずること能はず耳を以て聞くことを得ざるもの、然れども人の彼を識得する無くんば一生自救不了に終るのみ、是故に禪門には學人の分別葛藤を誅して今時門頭の上にて今時を盡却せんことを要請せり、何となれば第一義は人の觀





測すること難しと雖も克く今時を盡却せば人の會し難き道理にもあらざればなり。[illegible]
藥山弘道大師(諱は惟儼)一夜燈燭無し衆に示して云く、吾に一句子有り特牛の兒を生ずるを待て卽ち汝に向て言はむと、僧出て云く特牛兒を生ぜり何としてか和尙言はざる、師把燈し來れと命ずれば僧卽ち衆位に歸す、是は此藥山坐下の特牛夜生兒の話なり、特牛夜生兒是れ何の時節ぞ審細に工夫すべし所以者何第一義は無文字なれども今時門の上にて說明する時は人の會し難き道理にもあらざればなり、今世尊及び空生は第一義の上より慈悲の眸を垂れて說法敎化せり、然れば則ち世尊の親言空生の問端は吾が爲めに徹悟なることを得たり、然れども悲ひかな迅雷耳を劈けども聾者は道箇の道理を

聽かず、吾人は幸にして聾者たることを免がる、故に眼耳鼻舌を用ひて經を聞き且つ見ることを得たり、如上は且らく措く、吾が佛法の犀理には眼耳鼻舌身を借らずして、無文無字の經に通ずる妙用有り却て會すや。

佛法は文字の上より見れば、如來の言教は僅かに是れ五千餘卷に過ぎず、今無文字上より見れば萬象に餘りて裕かなり、昔者、鳳祖洞山大師言く、明中に當て暗有りと、暗中の佛法人の知る無し苦なる哉苦なる哉、論じて此に至れば總ての言教は藤の樹に倚るが如し藤枯れ樹倒れて何物か有る翼くは讀者迅雷に耳を掠められて早く此事に著眼し眼耳鼻舌を用ひて聞無聞の理に通曉して向上の佛法を會得せんことを至禱至禱。

此經は般若八部の精要なり文簡にして義豐かに辭顯にして理密なり卽ち佛一絲毫を添へずして空生の問に答へ空生一絲毫を減ぜずして萬古不磨の寶典を打開す、故に註釋の勞を取る者も亦一塵を侵さず一相を破らざる範圍内に於て此經を註解し終んぬ、何となれば卽ち佛心の上には一も加ふべからざればなり、依て聊か此に此經を註解するの理由を敍して之が序と爲す。

明治四十三年四月八日

芳川祖眼識

天松居士濱地八郎氏、二十餘年來深く「金剛經」を尊重し其感應に依りて金剛天を厚く信仰せる結果、此經の眞髓なる「無我相」の三字を世に弘めしに旣に心願の數八萬四千に達せるを以てこれを紀念すべく自資を投じて地を東京横濱横須賀の咽喉たる東海道大船驛附近に選び、無我相山と稱す、著者亦、此經を研究すること久し、今や是の機緣に依て本書を刊行す、希くは共に法樂を同ふせんことを

明治四十三年四月八日

之が序と爲す



# 和譯註解 金剛般若波羅蜜經

姚秦 鳩摩羅什翻譯
日本 芳川祖眼註解

## 金剛般若波羅蜜經

一には經題を釋す此經を金剛般若と名く其故何ぞや、金剛は寶の名金の精なる者なり、是に三義有り卽ち摧破の義と光明の義と堅利の義と是也、般若は梵語此に智慧と翻す、波羅蜜此に到彼岸と云ふ其意は般若の智慧を修して佛の正徧二智の道に到る義に形取りたるなり。

二には金剛と名けたる三義を釋す一には此經は般若の智を金剛に喩ひたり、其意は般若の妙慧は煩惱を壞して煩惱業障に壞せられざるを以ての故に卽ち般若は煩惱を壞するを以て其德を金剛に喩ひて摧破の義を取りたり、謂る金剛の凝る所物として碎けざるは無しと云ふが如く此慧の照らす所法とし

て空ならざるは無しと云ふ義なり、二には般若の智慧を金剛の光明の義に喩ひたり何となれば般若は觀照の智慧を發揮して生死の暗を照らせばなり即ち衆生は般若の光明に照されて生死の難渡海を渡ればなり、三には般若の大智慧は平等の法なるを其德を金剛の堅利の義に喩ひたり即ち般若は平等の法なるが故に佛に在て增すにあらず衆生に在て減るにあらず故に是を不增不減の法と稱す此不增不減の法佛に在ては果滿の佛心也因位の菩薩に在ては發菩提の心也。

三には此經を註釋せんために此經の理性を明さば此經は無相を以て宗意と爲し無住を以て方便と爲して成佛の捷徑路を示す、今其次第は世尊は通別圓の三敎に配して諸部の般若を說く其中に於て此經の上に於て專ら圓敎眞實の法體を說く、而して此經は四處十六會の中の第九會の說法なり文簡にして義豐かに備はれり故に此經は八部の精要たり、明かす處の理趣は第一義空の眞體畢竟皆空の道理なり、諸佛諸聖の心體此中に在り故に歷代祖師の不惜身命の行持も皆此中より涌出する也。

四には實踐門此經は有爲の法を夢幻泡影露電雲と觀じて般若の實智道を修するなり夢幻泡影露電雲是を六觀と云ふ卽ち六觀は方便道也、此方便の力を借りて般若の妙慧を修するなり何となれば夢幻泡影露電雲は觀と來るに自性無し故に是を方便に借る。

五には五重の玄義を借りて經體を釋すべし、卽ち天台は五重の義を以て何れの經をも釋せり、今此玄義を以て此金剛經を分析せば此經は無相を以て宗と無し法喩を以て名と爲し斷疑を以て用と爲し實相を以て體と爲し無相大乘を敎相と爲して眞空妙有の法門を問答したるなり。

經とは常と訓す又法と訓す常とは萬古不易の常道なる意味なり法とは十界同遵の洪範と云ふ義なり卽ち此經は般若を修するの常道なり洪範なり故に經と云ふ依て金剛般若波羅蜜經の經題を釋すること是の如し。

是の如く我聞く一時に佛舍衞國の祇樹給孤獨園に在て大比丘衆千二百五十人と俱なりき。

是は正信序なり、佛說なることを確立す、是の如く我聞くとは阿難の自敍なり、

今法に約すれば是の如くとは般若の體を指して云ふ、是より六成就を明さむ

是の如くとは信成就なり我聞くとは聞成就なり一時とは時成就なり佛とは主成就なり舍衛國祇樹給孤獨園とは處成就なり大比丘衆とは衆成就なり、是の如くの六事具足して法を聞くことを得ればなり、千五百人とは常在の衆を云ふ須菩提舍利弗目犍連等の衆を云ふ、比丘は梵名怖魔と翻す卽ち波旬天魔も畏敬すればなり。

爾時に世尊食時に衣を著け鉢を持して舍衛大城に入り食を其城中に乞ひ次第に乞ひ已て本處に還至し飯食訖て衣鉢を收め洗足已て座を敷ひて而も坐す。

食時とは辰巳の間なり西土の風俗は晝夜を四時に配當せり、初分は寅卯辰の間を云ふ此間は諸天食時と爲す、次は中分巳未午の間を云ふ此間を三世諸佛の食時と爲す、三は晡分申酉戌の間を云ふ此間を畜生食時と爲す、四には夜分亥子丑の間を云ふ此間を鬼神食時と云ふ。

今世尊は般若を說くに臨みて日の初分に當りて著衣持鉢洗足敷座して大衆の者に示す、圖り知る般若は行住坐臥の間に行持されつゝあることを、故に四威儀を離れて外に般若無し、世尊は又此經を說くに臨んで自ら座を飾き玉ふ佛自ら座を飾くは般若を尊重するなり、誠に知る智度は菩薩の母能く法身を顯現すればなり。

時に長老須菩提大衆の中に在り、卽ち座より起て偏へに右肩を袒き右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言く、希有なり世尊如來は善く諸の菩薩を護念し善く諸の菩薩に付屬す、世尊善男子善女人阿耨多羅三藐三菩提心を發するものは云何ぞ應に住すべき云何ぞ其心を降伏せんや。

長老は衆中の上首也須菩提は空生と翻す又善現と云ふ佛の十大弟子の中の人眞空の理に通曉するが故に解空第一の稱有り眞諦言く須菩提は東方の青龍陀佛釋迦の會中に垂跡して空理を發揚すと、合掌は十界一如の相を現じた

るなり、右肩を袒ぐは西竺の畏敬の風俗なり、希有に三義有り卽ち時希有と處希有と最勝となり、佛の出世には値ひ難き義を云ふ、如來は十號の一本義は末段に至て顯る、菩薩念とは佛は法を說て菩薩を護念して能く衆生を饒益するを云ふ、善付屬とは佛は大法を菩薩に付屬して佛種をして斷絕すること無らしむるを云ふ、菩薩は覺有情と翻す本名は菩提薩埵摩訶薩埵也今提埵の二字を削りて菩薩と名けたり、梵名を存置せしは梵音は音調壯麗なればなり、阿耨多羅三藐三菩提は無上正徧智と翻す佛の正徧の二智を云ふ。

卽ち空生問ふて言く我未だ發心せざる時は心乃ち塵境に住せりき、今發心す應に何の境に住して何の心をか降伏すべきやと。

佛言く善哉善哉須菩提汝が所說の如し如來は善く諸の菩薩を護念し善く諸の菩薩に付屬す、汝今諦聽せよ當に汝が爲めに說くべし善男子善女人阿耨多羅三藐三菩提心を發せんものは應に是の如く住し是の如く其心を降伏すべし、唯然り世尊願樂して聞かんと欲す。

善哉とは空生を讚歎して言ふ、重て善哉と云ふは此間は大衆及び將來の衆生を饒益すること多ければなり、諦聽せよとは佛實相の法を說かんとす故に先に戒飾して一心に靜默せしめ玉ふなり、阿耨多羅三藐三菩提は佛心なり、此心因位に發すれば大悲深重の誓願を建立して衆生を憐愍す、故に一切の菩薩及び衆生は此心の發揮に勤むべし、夫れ菩提心を發せば目の醒めたる衆生なり、如何ならん人も眠りなば本心の智情意は活動せざるべし菩提心開發せば煩惱の眠り醒めて本心の妙用是より其運働を開始するに至る故に承陽大師言く縱ひ七才の女流なりとも卽ち四衆の導師也衆生の慈父也男女を論ずること勿れ此れ佛道極妙の法則也と、發菩提心の人間に取て必要なること是の如し夫れ人間は何時までも迷はねばならぬと云ふ制限規則はなかるべし然れば早く此心の發揮に勤むべし。

空生は菩提心を發したる者の修行の用心を問ひたるなり、世尊は之に對して降伏の法を答へ玉ふ卽ち發菩提心の人は應に是の如く住し是の如く其心を

降伏せよとなり、是の如しとは般若の體を暗示す天機聊か漏洩せり、空生は唯然りと順役の辭を發揮せり、然れども廣說を得ざるを以て願樂して聞かんと欲すと肉薄せりき。

佛須菩提に告げて言く諸の菩薩摩訶薩は應に是の如く其心を降伏せよとは所有る一切衆生の類若くは卵生若くは胎生若くは濕生若くに化生若くは有色若くは無色若くは有想若くは無想若くは非有想若くは非無想我皆無餘涅槃に入れて而も滅度せしむ。

空生問ふて言く云何が應に住すべき云何が降伏すべきも卽ち問は二問に分れたり、世尊は是を一にして答へ玉へり故に世尊初には諸の菩薩摩訶薩は應に是の如く其心を降伏すべしと說き起して降伏の法のみを說けり。

胎卵濕化の四生は三界受生の差別を分類して說きたるなり、衆生は生死の業を造りて枝條花葉三界二十五有に徧滿せり故に生を論ずれば悉く四生を出でざるなり、就中て有色とは色界天なり無色と云ふは無色界天なり有想とは識處天なり無想とは無所有處天なり非有想非無想は非想非非想處天なり、涅槃は梵語不生不滅と翻す滅度とは煩惱を斷盡して苦を解脫する義なり、無餘とは成佛究竟餘依なき義なり、卽ち三界の衆生を悉く成佛せしめて殘さざる義なり、卽ち關門を打開して驢事馬事皆通ぜしむる處なり、菩薩深重の誓願十方普度其廣大なること是の如し。

夫れ一切衆生の根生皆同じからず如何ぞ此等の群類をして悉く涅槃に入らしむることを得べきや、世尊佛心の廣大なる道理を示す處なるが故に是の如し何をか佛心と云ふや、佛心は是れ非思量なり、此境に入らんと欲せば直下第二念に涉らず直截根源し以て此妙境に入るなり、若し能く此妙境に入らば大光普照して十方刹を照らずを以て卽ち十方刹に般若の光明を放つを以て盡動含靈より草木墻壁に至るまで悉く無等々の佛身を受用せしむるなり、故に坐禪人正身端座非思量の王三昧に坐せば坐禪人一時の力は蓦に盡虛空を衝破し盡虛空を築著して無邊際の大威神力を以て吾に緣ある六道の群類を悉

く明淨明心せしむるなり故に三途八難の衆生は坐禪人の加被力を受けて衆苦を解脫するのみならず坐禪の法力を受けて悉く諸佛の本地の法樂に預るなり、佛敎の不可思議今に初まりたるにあらず。

是の如く無量無數無邊の衆生を滅度すれども實に衆生の滅度を得る者無し何を以ての故に若し菩薩に我相人相衆生相壽者相有らは卽ち菩薩にあらず。

菩薩は佛心を發揮して菩薩と稱す佛心は無上正等正覺心なり、故に菩薩摩訶薩には四相無きなり、若し人中の四相有らば菩薩と稱することを得ざるなり。四相と云ふは五蘊の法を執着するか或は五蘊の法の上に迷を生じて我相人相衆生相壽者相の見を起すを云ふ、五蘊は色受想行識是也、就中我相と云ふは五蘊が相續する法を認識して我我所の法とするを我相と云ふ、人相衆生相壽者相皆此範圍を出でず、卽ち人相とは人我の見を云ふ、衆生相とは偏見を立て萬有の性相を謬判するを云ふ、卽ち眼を船に著けて岸を見れば岸動くと見る本來は岸の移るにあらずして舟の進むなり、壽者相を自己を運びて萬法を測斷して自身自性は是れ常住なるかと判ずる是れ卽ち壽者相なり是の如きは皆五蘊の妄想なり、五蘊の中の妄想は佛道と相容れず、世尊四相有らば菩薩にあらずと說き玉ふも此妄想有ればなり、一に偏計所執性、偏計執とは天地の相分を己が意識に隨て判じて情有理の計に陷ることなり、例へば知者には知者の鑑識有るべく無學の者には無學の者に相應したる判斷力有るべし、故に天地の相分は眞直に解釋すれば眞直に解釋さるべく枉げて解釋すれば曲げて解釋さるべし、而して其解釋せられたる者の中には皆一脈の情理有るなり、然れども生知の人或は悟眞の知を發揮したる人に有らざるよりは實の如く三界を所見すること能はざりき、嘗て飛行機を利用して空中を旅行する人有り、或夜氣壓を恐れて寢に就きしかば夢に虞風從來すと見る吾は從劫至劫山麓に止らざるべからずと見る、泣て道を他に轉ぜんとすれば其處は大洪水人民は愉快らしく疾風淋雨の間を走れり、須臾にして雨風止み世界は本の海晏河清になりたりと見れば吾身は安樂椅子の上に横りて終夜瀑沫の聲を聞きし

なり、徧計所執より出づる妄想の夢は是の如し、須らく知るべし一時の夢の間に虞風を見洪水を見疾雨淋雨を見後には連想の繫りより雨笠烟蓑の人を見るに至る、人間が連想の思に驅られて徧計の鈎床に長き妄想の夢を貪ること是の如し、斯る妄想は皆是れ五蘊の識境より出づる謬想なり是を徧計所執の妄想と云ふ。

二には依他起性、依他起とは總べて衆緣和合の法を云ふ、即ち衆緣の合成生起する必らず依他起の力也、而して皆無性なるが故に無性の寄合也故に依他起性は譬へば麻の上の繩の如し麻の上の繩本來は著すべき無し、然れども迷ふ時は寤寐尙ほ執著するなり我法二執に迷へる衆生は徧計執の濃厚の處へ依他起上の迷にかすむが故に遂に情有理の計に陷るなり、般若の智見は是の如き葛藤を除するなり。

三には圓成實性、謂る眞空の智を以て眞空の理を照らす是を圓成實性と名く、以來此眼を以て諸法を見れば諸法を見錯ること無し何となれば圓證の智の上には理智相應すればなり、故に圓成實性は前依計に異りて唯一平等眞滿成實也是を圓成實性と名く。

復次に須菩提菩薩は法に於て應に住する所無くして布施を行ずべし、謂る色に住して布施せざれ聲香味觸法に住して布施せざれ、須菩提菩薩は應に是の如く布施して相に住せざるべし。

降伏の法を行に約して說く法とは六塵を指す、布施に三有り資生施無畏法施也、今一施を擧ぐるに依りて資生も施無畏も法施も皆攝せらる、應に住する所無くして布施を行ずべしとは行ずる上に約して降伏の法を說きたるなり、詳しく言へば行とは行ずることにて卽ち初發心の夕より便成正覺の曉に至るまで修行有り、故に世尊降伏の法を行に約して行の一般方略を示す、文簡にして義縱橫なり、須らく知るべし一施に三施を攝じ三施に六度を兼ね六度に萬行を兼ね終る、卽ち始め五蘊より終り菩提に至るまで住すべからざる法此一行に約して說き終る、所謂の下は別釋なり。

(一)布施…一攝一…施　(二)持戒忍辱…二攝二…施　(三)精進禪定智慧…三攝三…施　一施三施也三施六度也

須菩提意に於て云何東方の虚空思量すべけんや不や、不也世尊、南西北方四維上下の虚空すべけんや不や、不也世尊、須菩提相に住する所無くして布施せば福徳も亦復是の如し思量すべからず、須菩提菩薩は但應に教ふる所の如く住すべし。

相に住せざれば性空の理に契ふ性空は功徳無量福徳無邊なり、故に世尊十方虚空の喩を掲ぐ就中て東方虚空の喩は廣大無盡の意南西北方の喩は究竟無窮の意なり、相に住せざれば是の如く性空の理に契ふなり、此經は性空の理を究めて無邊の功徳を獲得するに在り此經是にて終る、故に世尊但應に教ふる所の如く住すべしと降伏の法を結す、佛空生の問に答へ終んぬ是より流通分に入らんとす、然れども如來の答處に於て疑を生じ空生更らに問ひを起し世尊斷を爲し斷疑覺て又問ひを起し次第して文多く義重りて此經遂に二十七段に至りて止むなり、故に次下の經文有り。

須菩提意に於て云何身相を以て如來を見るべけんや不や、不也世尊身相を以て如來を見ることを得べからず何を以ての故に如來所說の身相は卽ち身相にあらすと、佛須菩提に告げて言く凡そ所有る相は皆是れ虚妄なり、若し諸相は非相なりと見れは卽ち如來を見る。

第二十七段の中初段佛を求め施を行じ相に住する疑を斷ず、卽ち佛を求めんが爲めに布施を行せば相に住することゝなる何ぞ無住なるを得んや又相に住せざるを因とせば佛に色相の果無るべし佛は何に故に色相の果有るやと今是疑を斷ずる所なり。

佛空生に問ふ身相を以て如來を見るべけんや不やと、空生は佛身無相の理を悟れり、故に身非身と答へたり、佛復示して言く所有る相は皆虚妄なり佛身と雖尙ほ虚妄なる道理を免れずと、何となれば如來の身相は淨分の所成なり輪

王の失れに同じからず然れども佛身尚ほ衆緣より合成せり衆緣より合成せる身は必らず無性の者の寄合なるべし故に身非身なり、苟も身非身ならば非身は必らず無性の者なるべし、此經は無性の理を究めて無相の法身を證するを主眼とす、然らば直に須らく無性の理を見出して無相の法身を證得すべし謂る無性とは方便なり無相は本旨なり此經は一年本實の理體に通達して無性の理を究め無性より無相に入りて一生緣起の相に通ずる一生の緣起眼を開くを以て此經の能事とす、故に吾人今無性の方便を借りて無相に入れば本身の如來に相見するを得べしとなり、若し信ぜずんば汝が日々思議紛飛する妄想を悉く一性本實の鑪鞴に入れて見よ佛人を欺かざるの道理昭々として顯現せんと示す處なり。

須菩提佛に白して言く世尊頗る衆生有りて是の如き言說章句を聞ひて實信を生するや否や、佛須菩提に告げて言く是說を作すこと莫れ如來の滅後後の五百歲に持戒修福の者有り



此章句に於て能く信心を生ぜん是を以て實と爲す、當に知るべし是人は一佛二佛三四五佛に於て而も善根を種ゆるのみならず已でに無量千萬佛の所に於て諸の善根を種へしなり。

第二段因果甚深にして衆生信無きの疑を斷ず、卽ち無住にして施を行ぜば因の深也非相にして佛を見れば果の深也、未來の衆生信を生ぜずと此疑を斷ずる處なり。

空生佛前に跪て白す世尊衆生有りて是の如き言說章句を聞ひて實信を生ずるや否やと、佛懸記して言く是說を作す莫れ最後の五百歲にも是に依て實信心を生ぜんと、是は世尊此經盛に世に行はれて弘宣流布することを懸記し玉ひたるなり、佛滅後に五つの五百歲有りとは第一は解脫堅固の五百歲也第二は禪定堅固の五百歲也第三は多聞堅固の五百歲也第四は搭寺堅固の五百歲也第五の五百歲は鬪諍堅固の世なり、卽ち最後の五百歲鬪諍堅固の世にも此經尙ほ流行すとなり。

此章句を聞て乃至一念淨信を生ぜん者須菩提如來は是諸の衆生は是の如く無量の福德を得んことを悉知悉見す、何を以ての故に是諸の衆生は復我相人相衆生相壽者相無く法相も無く非法相も無し。

淨信とは清淨の心を云ふ清淨の心は實信なり卽ち眞無相法の旨を聞て一念淨信を生ぜば功德無量なり況や永信の者をや、故に此經を信ぜば人中の四相を離れ法と非法とを離れて無量の福德を得べしとなり。

何を以ての故に是諸の衆生若し心に相を取らば卽ち我人衆生壽者に著す、若し法相を取らば卽ち我人衆生壽者に著す、何を以ての故に非法相を取らば卽ち我人衆生壽者に著す。

此章は法相と非法相との取るべからざる道理を釋する處なり卽ち初の一句は總釋なり卽ち心に相を取らばの句は總じて法非法の取るべからざることを明じたるなり、後の二句は別釋なり卽ち法と非法とを別釋したるなり、法相とは名有り相有る者を云ふ、非法相とは法相を非認したる者にて卽ち名無く相無くして非有似有の者なり、詳言せば法相は有の見にして凡夫の常習なり非法相は無の見にして斷見外道なり、世間の人が善惡因果の理性を味して一切諸法は是れ斷滅と見るが如きは此非法相に屬す、故に非法相派は天地の法相の理を味して因果も無く因果應報の理も無しと見て空見外道の見解に陷るなり、卽ち衆生は迷ふて法相を執するが故に有の見を起しては生死に墮在し無の見を起しては地獄に墮在して身心に痛苦を受くるなり、設ひ心は身を離れて別に無しと思量すとも地獄の苦患は免るべき分在の者にあらず況や己が靈魂は死して尙ほ身相を現行しつゝ有るをや、故に人間は罪を造りなば地獄に入りて非有似有の苦器に苦めらるべし、卽ち衆生は徒らに惡業を造りて徒らに非有似有の獄卒等に責めらる明眼の人より見て歎しき次第なり、是れ皆法相を非認したる過なり、般若の智見は是の如き業火を吹滅す故に一念淨信を發抑せば功德無量なり況や永信の者をや。

是故に法をも說くべからず非法をも取るべからず是義を以

ての故に汝等比丘我が說法は筏喩の如しと知るべき者なり法尙は應に捨つべし況や非法をや。

世尊法非法の取るべからざる道理を諭し終るが故に今緊接して結文す、卽ち法と非法とは兩頭俱に不可なり當て戒眞無相の敎體を信ずる人は四相を離れ法相の迷も無く斷見の見も無しとなり、如來は此二執を遣らんが爲めに說法すと故に說法は筏喩の如しとなり。

須菩提意に於て云何如來阿耨多羅三藐三菩提を得たりや不や如來所說の法有りや不や、須菩提言く世尊我が佛の所說の義を解するが如きは定法の阿耨多羅三藐三菩提と名くる有る無く亦定法の如來の說くべき有る無し、何を以ての故に如來所說の法は皆取るべからず說くべからず法にあらず非法にあらず、所以者何一切の賢聖は皆無爲の法に而も差別有るを以てなり。

第三段無相云何ぞ說を得るやと云ふ疑を斷ず、先に說く相を以て佛を見るべからず佛は有爲にあらずと佛道を得て法を說くは何ぞや法の取るべき說くべき有るにあらずやと、故に世尊擧げて問ひ空生隨て答ふ卽ち空生は深く佛理に通曉するを以て定法も無く定法の說くべき無しと答へたり、何となれば如來所說の法は本來名相を離れ取ることを得ず說くことを得ず法にあらず非法にあらず是を無爲の法と云ふ、此無爲の法は妙體淵寂體用如々名無く相無く一切の語言盡きたり唯證して知るべきのみ故に無爲の法を以て差別有りと云ふ。

須菩提意に於て云何若し人三千大千世界に滿つる七寶を以て布施に用ふ是人所得の福德寧ろ多しとせんや不や、須菩提言く甚だ多し世尊何を以ての故に是福德は卽ち福德の性にあらず是故に如來は福德多しと說く。

上に三空の理（我空法空俱空是を三空と云ふ俱空とは同一刹那に二空を觀するを云）を明し竟る今無爲の功德を擧げて寶施と較量するなり、三千大千世界とは須彌四洲日月欲天梵世名千集りたる數を小千と云ふ小千の千倍が中千にして中千の千倍が大千なり是を三千大千世界と云ふ、福德にあらずとは勝義の空に約するが故に福德多しとは俗諦に約すればなり、佛法從來此兩節有り今重て其道理を說かん。

夫れ福德の性にあらずとは性空の理に約するが故に性空は測ること能はず何となれば本來名相を離れ取るを得ず說くを得ず法にあらず非法にあらざればなり、故に人々性空の理に達すれば功德無量なり、又說く性空は佛性海なり佛性海は天廣も是を測ること能はず又其性空の功德の理は三世の諸佛も口を壁上に掛くるなり。

若し復人有り此經の中に於て乃至四句の偈等を受持して他人の爲めに說かん其福彼に勝れり、何を以ての故に須菩提一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆此經より出づ、須菩提謂ふ所の佛法は卽ち佛法にあらず。



徵釋して言く寶施何を以ての故に持して一偈を說くにだも及ざるや、答て言く寶施多しと雖盡くること有り持經の功德は盡くること無し、世尊は今其然る所以を釋し玉ひて須菩提一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆此經より出づと說き玉へり、然れば則ち一切諸佛及び諸佛の無上正徧智の道は皆此金剛般若より出現し玉ふなり、何となれば此經は悟性圓融能く有爲を斷ぜずして無爲を證せしむればなり、夫れ衆生は皆悟性圓融の智を具備せるが故に世間の中に於て悟眞の知有り故に世間の染淨諸法一絲紊れずして淨穢を判明せしむるなり、故に吾人今悟性圓融の智を修身練磨することを得れば生滅身の中に不生滅身を現出すべく諸法の中に不增不減の本體を露出せしむることを得べし、加之ならず一念頃に三世界を表現すべく所現の三世を一念に收むることを得べし是れ皆阿耨多羅三藐三菩提の働きなり、世尊は一切諸佛及び諸佛の法の此經より出現する道理を說き玉ふこと是の如し然れども佛又人の佛法の上に住著することを恐れて須菩提所謂る佛法は卽ち

佛法にあらずと道破し玉へり。

何となれば俗諦に約するが故に佛法有り眞諦に約すれば佛法無し、請ふ看よ諸法の本狀の上より諸法を見れば諸法の上には生有り滅あり諸佛有り衆生有り迷有り悟有りて諸法の相歷然たり、之に反して諸法の諸法ならざる時は生無く滅無く諸佛無く衆生無く迷無く悟無し、故に眞諦に約すれば佛法無し俗諦に約すれば佛法有り、今諸法の法爾如然として萬有を涌出する處を名けて一性緣起の相と云ふ此一性緣起の法門は是れ則ち俗諦なり、苟くも諸法を究盡する處に諸法の名相顯れず諸佛佛量無く衆生生相を勦絶して凡情聖解の見解總に盡きたる是を一性本實の理體とは云ふなり、故に一性本實の理體より見れば佛法既でに佛法にあらず佛法佛法にあらざれば佛法何ぞ此經より出でんや、此道理は大地火發底の道理の如し故に圓覺經に云く一切如來の圓覺の妙心菩提及び涅槃無し成佛不成佛無し妄輪廻非輪廻無しと。

問ふて云く此經に說く四句の偈とは何れの句を指すや又四句の偈に付て人說不同なる點を擧げよ。



答て云く四句の偈とは經中思ひ思ひに四句を選び取て之に宛つる者の如し、有說は無我無人無衆生無壽者を以て之に宛て、有爲無爲非有爲非無爲を取て之に宛て、有說は凡所有相皆是虛妄若見諸相非相卽見如來を以て四句の偈と爲し、有說は若以色見我の偈或は一切有爲法如夢幻泡影の偈を以て四句の偈と爲すなり、然れども經意は皆然らず何となれば上に乃至の字有りて下に等の字を置くが故に多より少に至る義なるべし、卽ち此經を讀誦すること全卷半卷一段一章より乃至四句の偈等にてもと云ふ順序なるべし。

須菩提意に於て云何須陀洹能く是念を作さん我須陀洹果を得たりや不や、須菩提言く不なり世尊、何を以ての故に須陀洹を名けて入流とす而も所入無し色聲香味觸法に入らず是を須陀洹と名つく。

第四段聲聞の得果は取と云ふ疑を斷ず、上に說く聖人無爲の法は取說すべからずと云ふ人疑て云く聲聞各自果を取り若くば證すと說く豈に取說有るに

わらずやと是難起るが故に世尊擧げて問ふ空生は取の本は無取說の本は無說の意を言ひ顯せり、須陀洹は聲聞の初果入流と翻ず八十八使の分別の粗惑を斷じて四惡趣の生を離れて聖者の流域に入ればなり、所入無し色聲香味觸法に入らずとは六塵に著せざるを云ふ。

須菩提意に於て云何斯陀含能く是念を作さん我斯陀含果を得たりや不や、須菩提言く不なり世尊何を以ての故に斯陀含を一往來と名く而も實には往來無し是を斯陀含と名く、

斯陀含は聲聞の二果なり、蓋し欲界の九品の思惑有り六品を斷じて後の三品未だ斷ぜず更らに欲界に一度生を受くべし、故に一來と云ふ、往來無しとは往來の相に著せざるを云ふ。

須菩提意に於て云何阿那含能く是念を作さん我阿那含果を得たりや不や、須菩提言く不なり世尊何を以ての故に阿那含を名けて不來と爲す而も實には不來無し是故に阿那含と名く。

聲聞の三果なり欲界九品の思惑を斷ずるを阿那含と名く、此位に上れば我空を得たり故に不來と翻す、不來無しとは不來の相に著せざるを云ふ。

須菩提意に於て云何、阿羅漢能く是念を作さん、我阿羅漢道を得たりや不や、須菩提言く不なり、世尊何を以ての故に實に法有て阿羅漢と名くること無し、世尊若し阿羅漢是念を作さん我阿羅漢道を得たりと、卽ち我人衆生壽者に著すと爲す。

聲聞の四果なり、上二界七十二品の思惑を斷じて盡きるを阿羅漢と云ふ、阿羅漢に三義有り、無賊見思の煩惱盡くれば、なり、二には不生分段生死盡くればなり、三には應供人天の供養に應ずるに堪ゆるが故に、法の阿羅漢と名くる有ること無きは阿羅漢果に著せざるを云ふ若し一念得果の心有れば卽ち我人等の相に著すとなり、此四果の中惟阿羅漢獨り道を得たりと名く餘の三果は未だ全く道の全體を得ざる者なり、記得す密迹力士佛前に於て寂意菩薩に告げ

て言く者婆醫王諸の藥石を集めて盞子形を造る端正殊妙なり、或は往來し或は座臥して周旋經行自在なり、國王大臣百官豪貴商姓長者居士者婆醫王の所に來り、藥盞子の前に歌ひ戲れて其顏色を見れば諸病皆除かりて安穩なりと今も復爾り、三毒盛りなる男女須陀洹斯陀含阿那含等の三果の聖者を見れば塵勞悉く休息することを得て人天の大果報を受得するなり、故に三果未だ道を得ずとて信ずる衆生福報を得ざるにあらず、況や阿羅漢果をや。

世尊佛我無諍三昧を得て人中最も第一たり是れ第一の離欲阿羅漢と說くも、世尊我は是れ我は是離欲の阿羅漢と念ふことを作さず、世尊我若し是念を作さん、我阿羅漢道を得たりと、世尊は卽ち須菩提は是れ阿蘭那行を樂ふ者と說かず、須菩提實に所行なきを以て而も須菩提は是れ阿蘭那行を樂ふと名く、

前に佛四果を擧げて問ふ空生皆所得無しと云ふ、此經是にて竟れり空生更らに自己の離欲の果を引證して如來に後分の說法を請はんとす、故に本行の所說有り、無諍と云ふは須菩提は空を解するを以て五蘊の妄見總に休歇したる是を無諍と云ふ、人中最も第一たりとは人中の四相を解脫すれば所得の念無く勝負の念無く希望の念無く生滅の念無し、之に反して四相有らば無諍なること能はず、故に心に生滅無ければ本覺常に照らす是を無諍と云ふと、離欲は三界の貪心の離れたるを云ふ阿蘭那は寂靜と翻す卽ち四相を解脫すれば離欲寂靜なるが故に寂然禪思の思想常に充滿すとなり。

佛須菩提に告げて言く意に於て云何如來は昔然燈佛の所に在て法に於て所得有りや不や、不也世尊如來は然燈佛の所に在て法に於て實に所得無し。

第五段四果の無得を明かし覺る人疑て云く佛は然燈に隨て法を受けしにあらずやと故に世尊擧げて問ふ是を、要するに然燈の所說釋迦の所聞總べて眞空の智が眞空の理に契ふことを得るのみ、謂る智と理と冥ひ境と神と會ふ豈

に取説の沙汰有らんやとなり、眞智の境は唯證相應ずるのみ。

須菩提意に於て云何、菩薩は佛土を莊嚴するや不や、不也世尊何を以ての故に佛土を莊嚴するとは卽ち莊嚴にあらず是を莊嚴と名く。

第六段佛土を嚴淨するは不取に逆する疑を斷ず、卽ち法取るべからずんば佛土を嚴淨するは何ぞや是れ取にわらずやと是れ疑の伏する處なり故に世尊擧げて問ふ、夫れ菩薩六度萬行を修して佛土を嚴淨するも心に著する所無んば無所得の佛行を離れず故に空生答て言く莊嚴は非莊嚴なるべし是を莊嚴と名くと、蓋し莊嚴にあらずとは一性本實の理體に約したればなり、是を莊嚴と名くとは一性緣起の相に約するが故に。

佛土を嚴淨するとは菩薩成佛の時に得る報土を云ふ、卽ち佛土の中の種々の莊嚴は其菩薩の本所行に依て顯る、故に佛土を莊嚴するとは心を云ふ、維摩經に云く其心に隨へば卽ち佛土淨しと是なり故に此心淸淨ならは佛土を嚴淨すべし然れば佛土の莊嚴は何ぞ外飾を事とせんや、七寶の宮殿五彩の棟宇は皆外飾なり、外飾の莊嚴は凡夫の莊嚴也、菩薩の莊嚴は定慧の莊嚴也、定慧は卽ち無相無形の莊嚴也、無相無形の莊嚴は非嚴の嚴なるべし。

是故に須菩提諸の菩薩摩訶薩は應に是の如く淸淨の心を生ずべし、色に住して心を生ずべからず聲香味觸法に住して心を生ずべからず、應に住する所無ふして而も其心を生ずべし。

應に是の如く淸淨の心を生ずべしとは無染心を涌發せんことを勸むる世尊の功なる爲人なり何となれは一性本實の理體に通達すれば一切時に處して著する處無し、著せずんば行は無行なるべし行は無行となりて六塵の繫縛を脫すべし。

須菩提譬へば人有り身須彌山王の如きんば意に於て云何是身大なりとせんや不や、須菩提言く甚だ大なり世尊、何を以ての故に佛は身にあらざる是を大身と名くと說く。

第七段如來報身を受得す是れ取にあらずやと此疑を斷ず顧ふに報身を受得するも取にあらず報身大なるも大にあらず故に世尊擧げて問ふ、空生は第一義を悟れり故に言ふ報身大なりと雖一性本實の理に約すれば報身大なるにあらず一性の緣起に約するが故に大なりとすと、報身大にあらざること是の如し、故に如來報身を受得するも取にあらざるべし何となれば取の本は無取なればなり、大に二義有り一は體に約す卽ち身智優劣無く廣大の義卽ち法身なり、二には位に約す諸聖も及ぶ無し今非身とは法身に約して言ふ大身とは報身なり、觀經疏に云く佛身本際無く量無し世間に順應して身量を現ずと。

須菩提恒河の中所有る沙の數の如き是の如き沙に等き恒河あらん意に於て云何、是諸の恒河沙寧ろ多しとせんや不や、須菩提言く甚だ多し世尊但し諸の恒河すら尙ほ多くして無數なり何に況や其沙をや、須菩提我今實言を以て汝に告げん若し善男子善女人七寶を以て爾所の恒河沙數なる三千大千世界に滿て以て布施に用ふ、福を得ること多きや不や、須菩提言く甚だ多し世尊、佛須菩提に告ぐ若し善男子善女人此經の中に於て乃至四句の偈等を受持して他人の爲めに說かば而も此福德は前の福に勝れり。

初一恒河の沙を袋に入れて一沙を一恒河に充て計へなば此に諸の無算數の恒河集るべし、又諸の無算數の恒河の沙をば袋に入れて一沙を一三千大千界に充て計へなば其沙袋の盡きたる時分に無量の三千大千界集るべし、其無量の三千大千界に七寶を充滿して布施せば如何との借問なり、持經の功德は尙ほ其よりも廣大なりとなり、無量大千の寶施の福多しと雖其實以て多しと言ふに足らざるなり、何となれば持經の功德は二執を滅亡して佛身を成就すればなり、物の比倫に堪へたる無し扨て此中較量の喩前に過ぎたり世尊は何に故に斯かる深甚の喩を擧するや、曰前は法施一條の理を明したるに過ぎず故に比喩も一大千にて足れり、今は四果の無念釋迦の無得非嚴の嚴無取の證

を以て佛身を證する理を明かすが故に較量の喩も前より過ぎたり。

恒河は河の名周囲四十里金沙混流細なること麵粉の如し、故に以て喩に擧ぐ、

此贍部洲中より北に向て九の黑山有り次に大雪山有り、次に香醉山有り雪の北香の南に大池水有り、縱横五十由旬八功德水其中に充滿せり、中に於て四面各一大河を出す池を繞り一匝して海に入る、恆河は其河の一なりき。

復次に須菩提隨て此經乃至四句の偈等を說かん當に知るべし此處は一切世間天人阿修羅皆應に供養すること佛の塔廟の如くすべし何に況や人有り盡く能く受持し讀誦せんをや、須菩提當に知るべし是人は最上第一希有の法を成就す、若し是經典所在の處には卽ち佛若くは尊重の弟子有りと爲す。

此經講演の處は佛塔に等き勝有り又持經すれば最上第一の法を成就す、又經卷所在の處は法報應の三身有り、故に經典安置の處には宜しく塔を建て雲を摩して雲霄に登べしめ遠近の者をして恭敬供養せしめつべし。



爾時に須菩提佛に白して言く、世尊當に何んとか此經を名くべき我等云何ぞ奉持せん、佛須菩提に告げて言く、是經を名けて金剛般若波羅蜜と爲す是名字を以て汝當に奉持すべし、所以者何佛般若波羅蜜は卽ち般若波羅蜜にあらず是を般若波羅蜜と名く。

空生此經の深旨の理を聞くが故に受持せんが爲めに佛に向て經名を詮するを請ふ、佛金剛般若波羅蜜と名くと說て名字般若を擧す、何となれば此經は煩惱を照破すればなり、卽ち此經は煩惱を照破して煩惱に摧破せられざるを以ての故に其德を金剛に喩へたり、故に此經を金剛般若と名く、卽ち金剛の凝る處物として碎けざるは無しと云ふが如く、此慧の照らす所法として空ならざるは無しと、今世尊は名字を擧げ玉ふ卽ち此經の姓を擧ぐ是に依て實相般若觀照般若復皆一時に顯現することを得たり。

須菩提意に於て云何如來所說の法有りや不や、須菩提佛に白

して言く世尊如來には所說無し。

佛經名を詮するより人疑て云く佛果にも法の說くべき有りやと、故に世尊跡を拂はんとして如來に所說なきにも拘らず如來に所說有りやと問ふ、空生答て言く如來に所說無しと、何となれば有說を究盡せば無說なればなりと、故に聲名句文は巧に諸法の理致を說けども諸法の相を破らず又諸法の相を執せざるなり。

須菩提意に於て云何三千大千世界の所有る微塵是れ多しとせんや不や、須菩提言く甚だ多し、世尊、須菩提諸の微塵如來は微塵にあらざる是を微塵と名くと說く、如來は世界は世界にあらざる是を世界と名くと說く。

即ち微塵世界に自性無き道理を說て勝義の空を顯揚す、微塵集れば世界を成し散ずれば微塵となる集散離合常の自性無し、世尊是を引證して佛說の無性の道理を微塵世界の上に借り來て示す、即ち微塵世界に自性無きが如く佛說も亦無性なりと故に勝義の空に約すれば無性なるが故に微塵世界にあらず、一性緣起の相に約するが故に微塵と名け世界と名くとなり、故に微塵世界に自性無きが如く如來の有所說の法は直に無所說にして無所說の上には自性無しとなり。

須菩提意に於て云何三十二相を以て如來を見るべけんや不や不也世尊三十二相を以て如來を見るを得べからず何を以ての故に如來は三十二相は即ち是れ相にあらず是を三十二相と名くと說く。

世尊微塵世界に自性無き道理を說て佛說の無性なる理を建立す、人疑て言く微塵世界は非情なり佛身は是れ有情なり何ぞ自性無らんやと、故に佛三十二相を舉て驗す、空生は佛身無相の理を悟れり故に相を以て如來を觀ずと答へり何となれば相を推察するに無相なり故に有說を究盡せば無說なるべしと。佛身は淨分なり淨分の色身は水火も燒害すること能はず、然れども淨分と雖

依他なり依他は皆無性なり佛身故に非身なり、唯緣起に約して佛身なりとす。

佛阿毘曇經に云く一千阿僧祇世界所有の功德を以て佛の一毛孔を成す、是の如く佛の一毛孔の功德如來全身に遍き功德を成じて佛の一好を成す、是の如く八十種好を成就する功德增して百倍として如來身上の一相を成す、三十二相を成就する功德增して千倍として如來頂上の白毫相を成す、白毫と肉髻輪王是を具せず肉髻は梵烏瑟膩沙此土に高顯と飜す又無見頂相と飜す一切の飛天も頂を見ること能はざればなり、白毫は法華に眉間の毫光東方萬八千世界を照らすと云へり、佛身は是の如く清淨の不可思議集りて佛相を集成せり、

須菩提若し善男子善女人恒河沙に等き身命を以て布施せん、若し復人有り此經の中に於て乃至四句の偈等を受持して他人の爲めに說かん其福甚だ多し。

持經捨命よりも重き道理を說く、疑て云く寶施の持經に及ざるは身外の賊なればなり、身命の布施を以てせば或は持經に勝らむ是れ疑の伏在所なり、故に



捨命寶施に勝る理を以て持經の功德を難ずる處なり失れ捨命寶施に勝るも持經は尙ほ捨命に勝ること萬々なり、何となれば有爲生滅の果報は滅盡せば水泡の如し、之に反して無爲の功德は永く退轉せず卽ち生々に盡きず世々に增長すればなり。

爾時に須菩提是經を說くを聞て深く義趣を解して涕淚悲泣して而も佛に白して言く、希有なり世尊佛は是の如く甚深の經卷を說き玉ふ、我昔より來所說の慧眼も未だ曾て是の如き經を聞くことを得ず。

是は空生如來より深甚の經を聞て感泣に堪へず自ら智悟を述ぶるなり、慧眼と云ふは聲聞の所證我空の理を照らす者なり、卽ち我空の智慧にては此經の理解を會せず故に斯く言ふ。

世尊若し復人有り是經を聞くを得て信心淸淨ならば卽ち實相を生ぜん、當に知るべし是人は第一希有の功德を成就せん、

世尊是實相は卽ち是れ相にあらず是を如來は實相と名くと說く。

是經の實相を生ずる所以を明かす、信心淸淨とは不染心を云ふ實相は眞空の理に通達して得る所の知慧なり、謂ふ所の實相は無相なり、故に空生無相の理を釋して云く一性本實に約すれば實相は無相なり、一性緣起の相に約するが故に實相と名くと。

世尊我今是の如き經典を聞くを得て信解受持することは難しとするに足らず、若し當來の世後の五百歲に其衆生有りて此經を聞くことを得て信解受持せん是人は卽ち第一の希有なりと爲す、何を以ての故に此人は我相も無く人相も無く衆生相も無く壽者相も無し所以者何我相卽ち是れ相にあらず人相衆生相壽者相卽ち是れ相にあず何を以ての故に一切の



相を離るを卽ち諸佛と名く。

爾時に世尊より一切相を離る卽ち諸佛と名くるまで空生自述の辭中に於て迴遑として六重有り、初は聞法涕淚悲泣と、次は信心淸淨の段と、次は難易を對彰して此經の永く世に弘宣流布するを祈る段と、次は四相無きこと、次は法執を兼亡して二無我の智を成ずること、次は一切相を離れて諸佛の覺證現成することと、是の如き六重有り。

佛須菩提に告げて言く如是如是若し復人有り是經を聞くを得て驚かず怖れず畏れざらん、當に知るべし是人は甚だ希有なりと爲す、何を以ての故に須菩提如來は第一波羅蜜は卽ち第一波羅蜜にあらざる是を第一波羅蜜と名く。

如是とは空生自述の辭を歎賞して云ふ、重て如是と云ふは如是の因を指して云ふ第一波羅蜜は智慧波羅蜜を指して云ふ、第一波羅蜜が第一波羅蜜にあらざる處に此經の希有なる道理存在せり、卽ち戒眞無相の道理全く此に在り、故

に戒直、無相法の道理を聞て驚異せず、淨信を發揮する底の人は最上希有の道理を成就するが故に、此經に最尊最上甚深不可思議の道理有ること推して知べしとなり。

須菩提忍辱波羅蜜は如來は忍辱波羅蜜にあらずと說く是を忍辱波羅蜜と名く、何を以ての故に須菩提我昔歌利王に身體を割截せらるるが如き我爾時に於て我相も無く人相も無く衆生相も無く壽者相も無し、何を以ての故に我昔節々支解る時に於て若し我相人相衆生相壽者相有らば應に瞋恨を生ずべし、須菩提又過去を念ふに五百世に於て忍辱仙人となる、爾所の世に於て我相も無く人相も無く衆生相も無く壽者相も無し。

第八段持說苦果を免れざる疑を斷ず先に捨命は身を苦めるのみ果報劣と示す今此法門を持して菩薩苦行を行ぜば亦是れ苦果なり此法何ぞ苦果を脫せざるやと此經の意は忍度は先づ般若を須ゐて忍度となるべし第一の勝義此に在りとなり、歌利王の事蹟は涅槃經に出づ、佛昔仙人と作て道を修す、歌利王妃と同じく遊山す、王花樹の下に寡飲して疲倦して寢に就く、妃諸女と同じく起て仙を禮す、仙王妃宮女の爲めに說法す、王醒めて妃を追從して仙を見る、王問ふて曰く、仙四果を得たりや、仙言く不也、王言く汝年少未だ四果を得ず應に貪慾有るべし、汝何ぞ惜を放恣して我が女人を見るや、仙言く我今貪慾の有結を斷ぜず然れども內心實に貪慾無しと、王起て問ふ大士何をか戒と爲すや、仙言く忍是れ戒となす、王言く忍是れ戒ならば汝が耳を剪るべし能く忍はゞ汝が戒を持するを知らん、王耳を截る我容色を變ぜざりし、王容色の改まらざるを視て又我に言て云く汝容顏變ぜず吾更らに變不變を試知すべしと言て四肢を切斷せり、我爾時に無量無邊の苦の衆生を憐愍す、時に四王天は王の所作を憎みて瞋石を雨らして王を懲成す王大に畏れて懺悔すと云ふ、此に又五百世の因緣を引くは此經の希有の果を說て希有の理を人に認識せしめ玉ふ處なり卽ち心に無相を證すれば忍を行じて苦果に滯らざること五百世是の如

しとなり、此經に最尊最上甚深不可思議の道理有ること是の如し。

是故に須菩提菩薩は應に一切相を離れて阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし、色に住して心を生ずべからず聲香味觸法に住して心を生ずべからず、應に所住なき心を生ずべし若し心住有れば卽ち住にあらずと爲す、是故に佛は說く菩薩は心色に住して布施すべからずと說く、須菩提菩薩は一切衆生を利益せん爲めに應に是の如く布施すべし、如來は一切諸相は卽ち是れ非相と說く又一切衆生は卽ち非衆生と說く。

第九段能證無體非因の疑を斷ず忍は般若を須ゐて苦果に滯らずと示す、人疑て言く能證して無體なれば證果の中には道無るべしと是疑問の伏在點なり、諸佛の法は對待の法を離れたり故に絕待の法は絕大の體を以て體とすと、故に無相の法身を證せんと欲せば離相の心を要す、我が佛故に離相の發心を勸むる處なり。



夫れ六塵に對して染着する所無くんば六塵悟むに足らず故に本行は相は本來實者なれども離れと說く旨意にあらず、相は本來執すべきにあらざるが故に、相を離れて本性一實の理體に通達して緣起生滅の法門に遊戯せよとなり。

須菩提如來は眞語の者實語の者如語の者不誑語の者不異語の者なり須菩提如來所得の法此法は實も無く虛も無し。

上に離相の發心を勸む、人疑て云く諸相は固より虛なるべし然れども菩提は實有らん、今相を離れば無體なり無體豈に菩提を待んやと云て佛語を雲烟過眼に附するが故に五語を以て諭して信を涌起せしむる處なり。

眞語とは佛語に配當ずれば一切衆生悉有佛性の類の如し實語とは衆生惡業を造くれば定で苦報有りと說くが如き是れなり、其他大小權實頓漸半滿の教悉く眞語實語なり、故に佛教は義門江海の如くにして文理精密に理明々とし て月の如く輝けり、是に依て學者の昧心を啓らき知者の懸解をして漸く入れば漸く深からしむ、今如來の法は本性空寂にして體本自如なるが故に實にも

あらず、又虛にもあらず、今菩提を實と爲んと欲して體性無きを疑はゞ安んぞ如來の法を得んや。

須菩提若し菩薩心法に住して而も布施を行ずれば人の暗に入るが如し所見無し、若し菩薩心法に住せず、而も布施を行ぜは人の目有るが如し日光明らかに照らして種々の色を見る。

第十段眞如有得無得の疑を斷ず卽ち聖人無爲の法若し眞如の名を得ば眞如は一切時處に恆存せり、何に故に得者不得者有るやと今此疑を斷じて云く是を得るは離相に有り、故に今離相を方便として卽ち目を人心に喩へ暗を相に惑はされぬ處に喩ひ明を相に著せざる處に喩ひ空を實相に喩ひ日光を觀照般若の智に喩ひ種々の色を性上の功德に喩ひて離相の布施を說きたるなり。

須菩提當來の世に若し善男子善女人有りて能く此經に於て受持し讀誦せん、卽ち如來佛智慧を以て悉く此人を知り悉く此人を見る皆無量無邊の功德を成就することを得ん。



世尊此經の眞無相の理を說き來りて其功德の理を明かしたるが故に離相の布施を說て結文す、卽ち此經は眞無相の故に受持すれば末世に有りても佛在世に異らず同じく無量の功德を成就すべしと。

須菩提若し善男子善女人有り初日分に恆河沙に等き身を以て布施し、中日分に復恆河沙に等き身を以て布施し、後日分に亦恆河沙に等き身を以て布施せん、是の如く無量百千萬億劫、身を以て布施せん、若し復人有り此經典を聞て信心逆はずんば其福彼に勝れり、何に況や書寫し受持し讀誦し人の爲めに解說せんをや、須菩提要を以て之を言へば此經には不可思議不可商量無量の功德有り。

是より五重を經て經の功德を讚す今は總標なり、夫れ多劫の捨身は諸法は本空なるを了せず、心能所有り未だ衆生の見を離れず、若し能く經を聞て道を悟り我人頓に盡きぬれは當下に卽佛なり、今捨身有漏の福を將て持經無漏の慧

に比すれば及ぶ可らず、故に十方に寶を聚め三世に捨身するも經の四句の偈を持するに如かずとなり、佛忍辱の說を執着して從らに身を以て布施するを恐る故に之を言ふ。

如來大乘を發する者の爲めに說く最上乘を發する者の爲めに說く、若し人有り能く受持し讀誦し廣く人の爲めに說かば、如來是人を悉く知り是人を悉く見る皆商るべからざる量るべからざる邊有るなき功德を成就することを得ん、是の如き人等は卽ち如來の阿耨多羅三藐三菩提を荷擔すと爲す、何を以ての故に須菩提若し小法を樂ふ者は我見人見衆生見壽者見に著し、卽ち此經に於て聽受し讀誦し人の爲めに解說することを能はず。

二には此經は大機の者の爲めに說くことを明かすは最上乘は圓頓の敎なり、此經は大機の者に對して說くが故に若し是を受持すれば無邊の功德を成得し無等々の佛心を成就して如來の大法を荷擔して衆生を利濟すべしとなり。

何を以て然るやと云ふに、小法を樂ふ人は自度に急にして自己の涅槃にのみ忙し、卽ち我見等の四見に著するが故に眞無相法の意を會せずとなり。

問ふ此經先に四果の無得を明かせり、此に至て小乘聲聞の人は四相に著すと說くは何ぞや。

曰く今小法を樂ふ者は我見人見衆生見壽者見に著すと說くは法無我を指して言ふ、吾が此經は我執に加へて法執衆區の主義を取れり、羅漢は法執を空ぜず故に斯く言ふ。

須菩提在々處々に若し此經有れば一切世間天人阿修羅の供養すべき所當に知るべし、此處は卽ち是を塔と爲す、皆應に恭敬し作禮し圍繞して諸の華香を以て而も其處に散すべし。

三には所在の處塔の勝の如きを明かす、經意は受持する無しと雖經卷安置の處は佛塔に同じきなり何に故にとなれば衆生の業報界は幽暗にして、牟尼世

尊の法のみ有て此幽暗を照らせはなり。

復次に須菩提善男子善女人此經を受持讀誦して、若し人の爲めに輕賤せられんに、是人先世の罪業有りて應に惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるるを以ての故に先世の罪業卽ち爲めに消滅して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

四には罪を轉じて成佛するの勝を明かす、若し人持經して後ち人の輕毀するに遭ふは先世の罪業の故に是の如し、蓋し是れは先世の罪業の故に三途の世界に墮すべきを持經の功を以ての故に輕賤の苦に換へて惡道の恐るべき苦果を免かれしめ玉ふ處なり其外尙ほ般若は能く觀照の智を以て無明を燒く、無明盡れば菩提の眞種日に增長せん。

須菩提我過去無量阿僧祇劫を念ふに然燈佛の前に於て八百四千萬億那由他の諸佛に値ふて悉皆供養承事して空く過くる者無し、若し復人有り後の末世に於て能く此經を受持し讀誦せん所得の功德は、我が諸佛を供養する所の功德に於ては百分の一にも及ばず、千萬億分乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。

五には多佛に事へるに超へる勝を明かす、那由他は數名なり十億を一洛叉と爲し、十洛叉を一俱胝と爲し、十俱胝を一那由他と爲す、卽ち供佛は持經に及ざる道理を明かす故に其功德を對比するに百分にして一に及ばず、千分にして一に及ばず、萬分にして一に及ばず、億分にして一に及ばず乃至算數分譬喩分も尙は較量すること能はざる處なりと。

須菩提善男子善女人後の末世に於て此經を受持し讀誦することあらば、所得の功德我若し具に說かば、或は人有り聞て心卽ち狂亂孤疑して信せず、須菩提當に知るべし、是經の義は思議すべからず果報も亦思議すべからず。

此經は佛空生と眞空妙有の法門を問答し玉ひたるなり佛心非思量の本體繁

もて此經の上に有り、今科段の意は上五重を經て其功德を明かし今又更らに極めて此經の功德を歎じて經の覺りとし玉ふなり、然かはあれば吾人は此經に依て無相無著の行を打して諸佛の阿耨多羅三藐三菩提心を發揮せざるべからず、然れば阿耨多羅三藐三菩提が呼吸し初むれば一切諸佛の道一切諸佛の法悉く現前すべし、然かあらば人々悉く人々分上の上に豐かに備はる處の無上菩提心を發揮して法身の慧命を相續して諸法實相の世界を現生し度する者なり、佛此經の所要を明かし玉ひて又說くべき無し、故に總括して經義思議すべからず、果報思議すべからずと說く、然るに空生は後來の衆生の爲めに或は現前に佛を見ると雖、盡く此經を會せざる者の爲めに復重請を爲したり、乃ち後分の說法有る所以なり。

爾時に須菩提佛に白して言く、世尊善男子善女人阿耨多羅三藐三菩提心を發せば云何ぞ應に住すべき、云何ぞ其心を降伏せんや。





第十一段佛前段に十種の疑執を拂ひ玉ひたり、今又重問重說の般若起るが故に重て人法二空の理を明かす處なり。

是より重問重說の般若、人は云ふ前問は人空の理の爲めに問ひ今は法空の理二の爲めに問を設くと雖、然らず、此經は人法二空の理を併せ說く空生豈に再問すべけんや、重問重說の般若は後來の衆生の爲めに、或は鈍根の迷の衆生の爲めに說く大品を判ずるに般若方便兩道各文を分てり、此經も亦然るか、智度菩提菩薩の父母實智道方便道皆親言なり、學者かならず異解を立つること莫れ。

佛須菩提に告げて言く善男子善女人阿耨多羅三藐三菩提心を發する者は當に是の如くの心を生ずべし、我應に一切衆生を滅度すべし一切衆生を滅度し已るに而も一衆生として滅度を得る者無し、何を以ての故に須菩提若し菩薩に我相人相衆生相壽者相有らば卽ち菩薩にあらず。

前に四相無きを菩薩と爲すと說く今も四相無きを菩薩と說く處なり、卽ち佛

相に住するを誡め、相に住せざるを菩薩の本所行として問ひに答へり。

所以者何須菩提實に法有りて阿耨多羅三藐三菩提心を發す

る者無し。

何に依りて法の菩提心たるべき者なきや、曰く此經は我法を空として實際の理致に通達するを以て此經の本旨とす、而して實際の理致は一塵を受けず此の一座不立の處是れ則ち非思量の本體なり。

須菩提意に於て云何、如來は然燈佛の所に於て法有て阿耨多羅三藐三菩提を得たりや不や、不也世尊我が佛の所說の義を解するが如きは、佛は然燈佛の所に於て法有て阿耨多羅三藐三菩提を得ること無し。

第十二段、佛因是れ菩薩なりとの疑を斷ず、卽ち若し菩提無くんば佛は然燈に見て菩提を得じは何ぞや、菩提無法ならば何が故ぞ是の如くなるやと是れ其疑の伏する處なり、故に世尊擧げて問ふ、空生は佛心の上には纖塵すらも立す





べからざるを知れり、故に無法無得と答へたり。

佛言く如是如是、須菩提實に法有て如來阿耨多羅三藐三菩提を得ること無し、須菩提若し法有て如來阿耨多羅三藐三菩提を得たりと云ば然燈佛は卽ち我に授記して、汝來世に於て當に作佛を得て釋迦牟尼と號すと與し玉はず、實に法有て阿耨多羅三藐三菩提を得ること無きを以て、是故に然燈佛我に授記を與へて是言を作す、汝來世に於て當に作佛を得て釋迦牟尼と號すべしと。

如是とは空生の言を印證して云ふ、後又反覆して之を釋す、底意は、若し法の得べき有れば有相の心にして菩提に順ぜず、之に反して法の得べき無くんば無相の心なり、無相は能く菩提に順應す、故に然燈是を紀以別すとなり。

何を以ての故に如來とは卽ち諸法如の義なり若し人有り如

來阿耨多羅三藐三菩提を得たりと言はんも、須菩提實に法有て佛の阿耨多羅三藐三菩提を得ること無し、須菩提如來所得の阿耨多羅三藐三菩提此中に於て實も無く虛も無し、是故に如來は一切法皆是佛法と說く、須菩提言ふ所の一切法は卽ち一切法にあらず、是故に一切法と名く。

第十三段無因佛法無しとの疑を斷ず、若し菩提無くんば如來も無しとの難起るが故に、如來とは如の義と釋し玉ひたり、卽ち如とは眞如を云ふ、眞如は一切凡聖迷悟生滅去來無し又何ぞ得不得虛實の法有らんや、故に如來は眞如に安住して覺體本淨諸法を立せず諸法を碍へず、譬へば淨明の鏡の能く物に應じて形を現ずるが如し、鏡體は常に不生不滅なり、故に如の義と云ふ、然れども如に一切法の來て現ずるを妨げず故に眞如は一切法を碍へざるなり、是故に佛法の中に一切法現成せり故に一切法は皆是佛法なり、然れば眞如は諸法を碍へず諸法は眞如を碍へざる道理能く好く思惟すべきなり。



須菩提譬へば人身長大なるが如し、須菩提言く世尊如來は人身長大なりと說くは卽ち大身にあらず是を大身と名く。

世尊の一切法皆是佛法の理を會せざるを以て世尊人身長大の喩を擧げて皆是佛法の理を知らしめんとする處なり、而して今說く此法報の二身は佛法の身心にして一切相を離れたる本身なり、空生は是に於て初めて一切法を知れり又佛身を知れり、故に非身大身の理を發揮して答へたり、謂るの非身大身とは無性の理を究めて無相の本身を證したるを云ふ。

須菩提菩薩も亦是の如し、若し此言を作さん我當に無量の衆生を滅度すべしと、卽ち菩薩と名けず、何を以ての故に須菩提實に法有て名けて菩薩と爲す無し、是故に佛は一切法は我も無く人も無く衆生も無く壽者も無しと說く。

上の文の空生が大身にあらざるを大身と名くと言ふを受けて云ふ、卽ち佛身も以上の道理の如く佛身非身なれば菩薩も亦是の如し、法の菩薩とする者無

しと示す處なり、故に亦の一字が字眼なり、本行は一切法皆是佛法の道理を顯揚して此中には四相有ることなき道理を示す。

須菩提若し菩薩是念を作さん我當に佛土を莊嚴すべし是を菩薩と名けず、何を以ての故に如來佛土を莊嚴するは卽ち莊嚴するにあらず是を莊嚴と名く。

第十四段人度無き莊嚴無き疑を斷ず、卽ち菩薩無くんば佛も菩提を得ず衆生も涅槃界に入らず淸淨の佛土も無し何が故ぞ菩薩は發心出家して衆生を度し佛土を嚴淨するやと是れ疑の伏する處なり、眞の菩薩は垢法の厭ふべきを見ず、淨法の求むべきを見ず、度衆生の心を作さず、不度衆生の念を作さず、何となれば一性本實の理體の上には纖塵すらも立せざればなり、天台此義を釋して云く菩薩無し何ぞ衆生有らんやと。

須菩提若し菩薩是言を作さん我當に佛土を莊嚴すべしと是を菩薩と名けず、何を以ての故に如來佛土を莊嚴すると說く





は卽ち莊嚴にあらず是を莊嚴と名く。

世尊有相を降伏し無相を菩薩の本行として勝義の莊嚴を示す、莊嚴にあらずとは勝義なるが故に、莊嚴とは俗諦なるが故に、勝義より俗諦に通ずれば悉く是れ、本性の緣起となる、而して本性の緣起は悉く是れ眞如の活波瀾なり、故に萬行を築て莊嚴するも一念有相の貪著有れば菩薩にあらずと爲す、文殊菩薩言へり我一切衆生の爲めに大莊嚴の心を發す然れども心莊嚴の相を見ずと心地無相の莊嚴は是の如し、之に反して有相の莊嚴は自ら其功を言ひて常に人知に急なるなり。

須菩提若し菩薩無我の法に通達せば如來は眞の是れ菩薩と名くと說く。

無我に二有り一には人無我なり卽ち人間の四相を空して人空の理に達するを云ふ二には法無我なり法性の理に通達して法執を衆區するを云ふ。

須菩提意に於て云何如來肉眼有りや不や、如是世尊如來は肉

眼有り。

須菩提意に於て云何如來天眼有りや不や、如是世尊如來は天眼有り。

須菩提意に於て云何如來慧眼有りや不や、如是世尊如來は慧眼有り。

須菩提意に於て云何如來法眼有りや不や、如是世尊如來は法眼有り。

須菩提意に於て云何如來佛眼有りや不や、如是世尊如來は佛眼有り。

第十五段諸佛は諸法を見ずといふ疑を斷ず、即ち菩薩は衆生の度すべきを見ず菩薩たりしを見ず清淨の佛土を見ずと、然れば諸佛は諸法を見ざるべし、今是疑を斷ぜんとして佛は廣く五眼の所見に約して說く。



肉眼とは凡夫の眼を云ふ、凡夫の眼は惟障内を見る、之に反して佛の肉眼は人中の世界を悉く見る、天眼とは肉眼の處に依て外の境界を想して觀想成る故に障外の事を見る名けて天眼と爲す、故に凡夫の天眼は能く障外を見るなり二乘の天眼は能く三界を見るなり、佛の天眼は諸天の細色及び無數恆沙の世界を見るなり。

慧眼とは智燭常明能く三世に照達す即ち根本智を以て眞空所證の理を照らす是を慧眼と云ふ其次第は二乘は我空の理を知るも未だ法空の理を照さず、菩薩は法空を曉了するも未だ圓現の力を缺く、故に此二者は未だ實際の理智を盡さず、之に反して佛は能く三空を圓照す、故に法として知らざるは無く生として度せざるは無し、故に佛の慧眼は三世に照達す、又能く自空内に三世の姓相を表現し六道生死の有樣及六道の衆生の受報好醜の差別を悉く觀見せしめ玉ふ、故に衆生悉く心を願さるを得んや。

法眼とは法性の理に通じたる眼を云ふ、即ち見性明徹能所永く除て一切の佛法自ら備はる是を法眼と名く、或は又是を同中異辨の眼と云ふ、智慧物に相應

する時は事に觸れずして知り緣に對せずして照らす、是を禪僧家にては頂門の眼と云ふ、吾人今此法性の理に通達せば天地の相分や人間の性相の理に迷さるに至るべし、扨て余は肉眼天眼慧眼法眼を數へて此に至る、而して四眼を圓融して以て佛眼と爲す、故に佛眼とは是の如く種々の法性の理を具備するに至りたるを佛眼とは名くるなり。

須菩提意に於て云何、恒河の中所有る沙の如き佛是沙を說くや不や、如是世尊如來は是沙を說き玉ふ、須菩提意に於て云何恒河の中の所有る沙の如き是の如き沙に等き恒河有らん、是諸の恒河の所有る沙の數の佛世界是の如きは寧ろ多しとせんや不や、甚だ多し、世尊佛須菩提に告げて言く、爾所の國土の中所有る衆生の若干種の心如來は悉く知る、何を以ての故に、如來は諸心は皆心にあらず是を名けて心と爲すと說く、

是れ五眼の所見を明かす迦邁と心とは五節有り初めには一恆河に約して沙を數へ、次には恆沙に約して河を數へ、三には無量恆河沙に約して世界を數へ、四には其所の界の所有る生類に約して五眼の力を明かし、五には所有る生の中の種々の心に約して五見五眼の力を明かす、卽ち如來五眼を以て照覩するに心皆心にあらずと爲す、心既に心にあらざれば衆生は既に衆生にあらずとなり。

所以者何須菩提過去心も不可得なり、現在心も不可得なり、未來心も不可得なり。

是は終りに非心の義を釋したるなり、心皆心にあらずと爲すは三際俱に不可得にして捕捉することを得ざればなり、何となれば過去は滅して跡を止めず現在は刹那に斷續して暫らくも停らず未來は未生なり將た何座を止めて以て心とするや是に於て見得せば十方世界に全身を現ずること有らん、然れども止止不須說我法妙難思。

須菩提意に於て云何若し人有り三千大千世界に滿る七寶を

以て布施に用ふ是人是因緣を以て福を得ること多らんや不や、如是世尊此人是因緣を以て福を得ること甚だ多し、須菩提若し福德に實有れば如來は福德を得ること多しと說かず、福德無なるを以ての故に如來は福德を得ること多しと說く。

第十六段福德心を倒にする疑を斷ず、即ち三心不可得なりと聞て人疑て言く、心不可得なれば修福の要無しと見て遂に修福の因を廢するを恐れて世尊實施の福を擧げて空生に問ふ、空生は多福を以て答へり、世尊は更らに性空の理を發揮して云く性空の理に通達せずして福を修せば福有漏となる有漏の福は多しと言ふべからず、之に反して若し性空の理に通達すれば福無漏となる無漏の福は甚だ大なりと謂ふべし、故に修福は是れ廢すべからずと。

須菩提意に於て云何、佛は具足色身を以て見るべけんや不や、不なり世尊如來は具足色身を以て見るべからず何を以ての故に如來は具足色身は卽ち具足色身にあらず是を具足色身





と名く須菩提意に於て云何如來は具足諸相を以て見るべけんや不や、不なり世尊如來は具足諸相を以て見るべからず、何を以ての故に如來は諸相具足は卽ち具足にあらず是を諸相具足と名く。

第十七段無爲何ぞ相好を要せんやの疑を斷ず、上に實施の福を擧ぐるに依て人謂らく佛の相好は修福より成る是色身に依て如來を見るべしと爲すが故に佛具足色身を以て空生に問ふ、空生は無相の理に通曉するが故に無相の意を答へたり、世尊は又具足諸相を以て如來を見るべきやと再擧し玉へり、空生は無相の理に通曉するが故に無相の意を答へたり。

此に言ふ具足色身具足諸相は應身の事なり、應身は權化なり故に權化の色身は法身の如來にあらず、此道理を喩れば法身は天月の如く應身は水像の如し、應身の水像は法身の天月を離れて別に有るにあらず卽ち應身なる影は法身なる光を離れて別に無し、故に色身に執著して佛を見れば佛轉た遠し、（但色相に執し

ても佛の一分之に反して色相本空なる道理に通曉せば此に佛身を見出すべしは見るべし。

と。

須菩提汝謂へることなかれ、如來是念を作す我當に所說の法有るべしと是念を作すことなかれ、何を以ての故に若し人如來に所說の法有りと言ば卽ち謗佛と爲る、我が所說を解する能はず、故に須菩提說法とは法の說くべき無し是を說法と名く。

第十八段無身何如ぞ說法するやの疑を斷ず、卽ち人疑て言く色相若し佛にあらずんば佛何如ぞ說法するや說法の能說者は是れ佛にあらざるかと、是疑を斷ぜん爲めに如來眞空の法體一法の說くべき理無きを顯揚する處なり、何となれば如來法身の上には說法無し其說法有るは衆生の機感の上に有り、故に如來の覺體は本淨にして能く衆生の機感に順應して說法す故に本を糺さば如來の說法は無說の說なり、然らば有說と思むも皆無說なり、須らく知るべし眞空の法體の上には應じて跡無く說て舌頭上に十字の開無ければなり。



世尊涅槃に入るに臨みて文殊再び佛に法輪を轉ずるを請ふ、世尊嘲して言く、我四十九年在世未だ曾て一字を說かず汝何ん爲る者ぞ吾に再び說法を請ふ、我嘗て法輪を轉ぜしや不やと。

維摩詰言く法は言說を離る言說卽解脫と了ずれば終日言ふべしと、是に依り て之を見れば世尊の道處と維摩道前後齟齬其揉各一也、是故に吾宗にては斯く言へり終日喫飯して嘗て一粒米を咬破せず終日著衣して嘗て一莖絲を掛着せずと。

爾時に慧命須菩提佛に白して言く、世尊頗る衆生有りて未來世に於て是法を說くを聞て信心を生するや不や、佛須菩提に告げて彼は衆生にあらず、衆生にあらざるにあらず何を以ての故に、須菩提衆生衆生とは如來は衆生にあらず、是を衆生と名くと說く。

本行の文字衆本に無くして魏本より出づ、無着天親二論具に釋文有り衆本に

は缺陷せるなり。

如來の說法無說なりと云ふ、無說の法を衆生豈に信ぜんやと、故に空生問ひを起して未來末世何等の衆生有りて無說の法を信ずるやと。

佛答て言く彼衆生にあらずと、卽ち世尊の意は衆生を衆生と見れば世界終末の期に達しても此經の眞眞無相の意を會せずとなり、衆生にあらざるにあらずとは、世尊衆生の根本緣起を釋したるなり、謂ふ所の根本緣起とは妄緣起を離れたる衆生を云ふ、終りに臨みて衆生とは衆生にあらず、是を衆生と名くとは、衆生にあらずとは勝義に約して云ふ、衆生と名くとは俗諦に約して說く、此一章の意は衆生は本有の上に般若の慧命を具足せり、故に敢へて聞かしむれば無說の法を能く信受すべしとなり。

須菩提佛に白して言く、世尊佛阿耨多羅三藐三菩提を得るは所得無しとせんや、佛の言く如是如是、須菩提我は阿耨多羅三藐三菩提に於て乃至少法も得べき有ること無し、是を阿耨多



羅三藐三菩提と名く。

第十九段無法如何が修證するやの疑を斷ず、前に法の說くべき無しと云ふ、若し說法無んば無法なり、無法如何が修證するやと是其疑問なり、故に空生問ふて言く佛の無上正徧智の道を得るは所得無き法なりやと、世尊は眞空の法體一法の得べき無きを以て一法をも得ずと答へ玉ひたり、何となれば至理は待無く眞如は一法をも得ず、故に得ると云ふは得べき無きを得ると云ふなり、今得べき無きを得れば失と云ふことは初より離れたり、苟も失無んば得も亦初より離れたり。

復次に須菩提是法は平等にして高下有ること無し、是を阿耨多羅三藐三菩提と名く、我も無く人も無く衆生も無く壽者も無くして一切の善法を修するを以て卽ち阿耨多羅三藐三菩提を得るなり、須菩提言ふ所の善法は、如來は、卽ち善法にあらずと說く是を善法と名く。

上に無上菩提は少法も得べき無しと說き今は少法の得べき無きは平等の法なればなりと釋し玉へり、何となれば此法は平等なるが故に得も無く失も無し、夫れ得有れば失有り然るに初より得無くんば何ぞ失有らんや、吾が佛敎は初より終まで常に是の如く相待の法を離れて所得無き法を履修す、平等の法なるが故に是の如し、然れども是の如き寂然平等の眞理も修因證果の功無んば安ぞ此法を得んや、故に佛は人中の四相を離れて是法を修せよと其因の修行を說き玉へり、而して其修因の善法も執すれは却て有爲となるを以て善法にあらずと直ちに其跡を拂ひ玉へり。

須菩提若し三千大千世界中の所有る諸須彌山王是の如き等の七寶聚を人の布施に持用する有らん、若し人此般若波羅蜜經乃至四句の偈等を以て受持し讀誦して他人の爲めに說かん、前の功德に於ては百分の一にも及ばず千萬億分乃至算數譬喩も及ぶこと能はさる所なり。

第二十段佛說因とならず善法能く因と作るの疑を斷ず卽ち一切の善法を修すれば無上菩提を得者則ち如來所說の法にては菩提を得ざるかと故に世尊寶施の福を擧げて無漏の法と較量す、卽ち無住般若の四句の偈を誦念し或は他人の爲めに演說せば其福は世界に於ける七寶聚園の布施の福の及ぶ所にあらず、何となれば般若は悟性圓融有爲を斷ぜず無爲を證ぜしむればなり安想を除かず眞を會せしむれば般若は悟性圓融有爲を斷ぜず無爲を證ぜしむればなり、然れば阿耨無上道の敎育が如何に吾人を馳衝して究竟の覺地へ趣向せしむるを思へとなり。

須菩提意に於て云何汝等謂へること勿れ、如來は是念を作す我當に衆生を度すべしと、須菩提是念を作すこと莫れ、何を以ての故に實に衆生有て如來の度する者無し、若し衆生有て如來度せば如來には卽ち我人衆生壽者有らん、須菩提如來我有りと說くは卽ち我有るにあらず而も凡夫の人は以て我有りと爲す、須菩提凡夫とは如來は凡夫にあらず是を凡夫と名く

と說く。

第二十一段平等なれば如何ぞ度生するとの疑を斷ず、卽ち是法は平等にして高下無しと說く人疑て云く平等なれば如來は何故に衆生を度するや既に衆生を度せは高下あるにあらずやと、故に如來本行を發揮して如來に度衆生無き理を顯揚す、如來に度生の念無きこと是の如し苟も度生の念無くんば終日度生すと雖一平等の理を妨げずとなり、何を以ての下は正見を示し我有るは凡夫なりと結す、而して凡夫も一性本實の理體の上にては見認むべからず況や如來に我有らんやと結び王へり。

須菩提意に於て云何、三十二相を以て如來を觀るべけんや不や、須菩提言く如是如是三十二相を以て如來を見る、佛須菩提に告げて言く、若し三十二相を以て如來を觀るならは轉輪聖王は卽ち是れ如來なるへし、須菩提佛に白して言く、世尊我が佛の所說の義を解するが如きは三十二相を以て如來を觀るべからず、爾時に世尊而も偈を說て言く。

若以色見我、以音聲求我、是人行邪道、不能見如來、

第二十二段相を以て眞佛に比知するの疑を斷ず、卽ち相を以て眞佛に比知するに不可なる理由有り、何となれば法身は相好にあらず相好も亦佛にあらざるにあらず是に於て法身應身の見分け定らず、然れども法身は畢竟して相好無し、應身は總じて相好を有せり、卽ち應身は法身に依て相を現じて法身を離れず、然れば無相に依て相を現ずれば、相を見れば無相の法身を知るべし、譬へば遠く山を隔てゝ烟を見れば火有るを知るが如し、例へば法身を離れて應身無し故に火を離れて外に烟無し、然れども如來は無相に依りて相を現じたる其相すらも許し玉はず、故に佛三十二相を擧げて空生を試驗す、空生は法身邊の上に迷ひ居れり、卽ち空生謂らく無相の法身身相を流注す此相に依りて無相の法身を證得すべしと、佛是を嫌ひ玉へり、故に輪王を以て難ず、乃ち偈を示し玉ふ、偈の意は眞如法身は見聞の及ぶ所にあらず乃ち眞智の境は唯證じて知るべきのみとなり。

須菩提汝若し是念を作さん、如來は具足相を以てせざるが故に阿耨多羅三藐三菩提を得たりと、須菩提是念を作すこと莫れ如來は具足相を以てせざるが故に阿耨多羅三藐三菩提を得たりと。

前に色聲を嫌ひしが故に今は斷滅を固執す、故に斷滅の見を誡む、卽ち有を誡めて有を遣れば無に附くが故に無の見も亦誡を受けしなり。

須菩提汝若し是念を作さん、阿耨多羅三藐三菩提心を發する者は諸法の斷滅を說くと、是念を作すこと莫れ、行を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提心を發する者は法に於て斷滅の相を說かず。

第二十三段佛の無上正徧智の道は福相に關するにあらずとの疑を斷ず、人疑て云く佛の無上正徧智の道は一向に無相無爲を貴ぶ然らば福德を修すれば相好圓實の果を成すべし、相好圓實の果は佛果にあらず佛果は具足相を以て見るを得ずと、若し此見解を以てせば因中に果を虧き果中に福德の莊嚴を損して諸法の斷滅を見るに至らむ、故に佛相を斷じて佛を求むるの不可を諭す處なり。

須菩提若し菩薩恒河沙等の世界に滿る七寶を以て布施に以用せん、若し復人有り一切法は無我と知て忍を成ずることを得ば此菩薩は先の菩薩の所得の福德に勝れり、行を以ての故に、須菩提諸の菩薩は福德を受けざるを以ての故に、

前に斷滅を誡め玉へり、故に斷滅の見に陷るべからず、今は世尊菩薩の斷滅を離れて二無我の智を成就して衆生を轉度し、二利の行を建立して果報を貪らざることを明かす所なり、何となれば菩薩は福德を受くるが故に福德劣なり、之に反して福德を受けざれば福德勝なればなり。

須菩提佛に白して言く、世尊云何ぞ菩薩は福德を受けざる、須菩提菩薩は所作の福德には貪著すべからず、是故に福德を受

けずと說く。

福德を受くるに依て福德劣となり、福德を受けざるに依て福德勝なり此義深甚なり故に空生問ひを起して云く何を以てか菩薩は福德を受けざるやと。世尊の底意は福を成して貪著すれば因有漏を成すが故に果も亦有漏なり、有漏の福德は劣なり之に反して福德を人に施與して貪著を生ぜざれば因無漏を成すが故に果も亦無漏なり、無漏の福德は最勝なり、故に菩薩は福德を施與して其果報を貪るべからず、若し果報を貪ること無くんば忍無我の智を成ぜんとなり。

須菩提若し人有り如來は若くは來り若くは去り若くは坐し若くは臥すと言はん是人は我が所說の義を解せず、何を以ての故に如來とは從來する所も無く亦去る所も無し故に如來と名く。

第二十四段應身出現受福の疑を斷ず、上に菩薩は無我の故に福を得ること實



施に勝ると說くを聞て人疑て云く佛の出現は受福の爲めなるかと是疑を斷ずる處なり、如來先づ結解を出して云く如來に去來坐臥有りと言ば佛說を解せずと、次に如來の定義を來して云く如來とは從來する所も無く亦去る所も無しと、何となれば、

法身は例へは月の任運に世界を照らすに如同せり、之に反して應身は萬像の月影を印せるが如し、天月は滿天なると全月なるとを問はず恆久に照らして去來今無しと雖月光は碎だけて草露葉間乃至尺寸の水にも宿るを如何せん、故に法身は淨法界身なり淨法界身は出現去來無し、其出現去來は應身の上に有り故に應身は緣に趣て出現受福す、出現受福すれども貪著の異性聊かも無しとなり。

須菩提若し善男子善女人三千大千世界を碎いて微塵と爲せば意に於て云何、是微塵衆寧ろ多しとせんや不や、甚だ多し世尊何を以ての故に是微塵衆實に有れば卽ち是微塵衆を說か

ず所以者何佛は微塵衆にあらず是を微塵衆と名く
と說く、世尊如來所說の三千大千世界は卽ち世界にあらず是
を世界と名く、何を以ての故に若し世界實有ならば一合相な
り、如來一合相を說き玉ふも卽ち一合相にあらず是を一合相
と名く、須菩提一合相者卽ち是れ說くべからず但凡夫の人は
其事に貪著すればなり。

第二十五段法身應身非一非異の義を釋して異化異有るの疑を斷ず、卽ち此道理を說くに微塵世界の譬喩を借り來る、科段は上に應身出現受福の疑を斷ずるが故に今は異化異有るべしとの疑を斷ずる處なり、先きに說く如來には坐臥去來無しと若し然らば異化異有るに似たり、故に微塵と世界とは異にもあらず亦一にも有らざる道理を說いて法身と應身との異にもあらず一にもあらざる道理を明かす處なり、卽ち其道理を示さんが爲めに假りに世界を法身に喩へ微塵を應身に喩へて乃ち界を碎して微塵と爲すが如く法身より分



身して千百億に分派するに至るなり、故に此間の定義は界を碎して塵と爲して塵に異性無しと云ふが如く而して塵を合して界と爲して界に一性無しと云ふが如く法身は百億に分身するも分身の上に異性無し而して分身を窮追せば法身に歸すべしと雖法化元來一なるにもあらずと云ふ處なり、世尊は特に此道理を補へ來りて善男子善女人三千大千世界を碎いて微塵と爲さば意に於て云何と借問を發せり、卽ち善男子善女人今法身の如來千百億に分身し玉へば意に於て云何此分身佛の出現は如何に多きや不やと、世尊道の此底意は分身如何に多きも法身と異なるにもあらず又法身如何に分身するも分身と一なるにもあらずとの意なり、空生は是に於て法化の二身の非一非異の道理を知れり、故に微塵に異性無き道理を仔細に點驗し持ち來て世尊道を聽聞せんと迫れり、故に空生は若し微塵衆に自性(自性と云ふは一異を云ふ)有れば世尊は法應の二身を說くに當りて微塵衆を借り來て比喩とし玉はざるべしと言へり、而して斯く言ふも未在なるが故に空生は更らに深く幽玄の底を叩いて言く、世尊よ假設ひ微塵衆に自性有らんも一性本實の爐鞴に入れな

ば一異は悉く同化するに至るべしと說て諸佛諸聖の心體を言ひ顯はせり。然らば若し微塵に自性無きを微塵と名くるが如きんば法身より分身するを應身と名く、而して法應俱に何等の一異をも止めざるなりと佛意是の如し、終りに臨みて空生は衆塵の合成せる相を一合相と說て世尊是を制止し玉へり、然れば一合相とは說くべからず。

須菩提若し人言はむ、佛は我見人見衆生見壽者見を說くと、須菩提意に於て云何、是人我が所說の義を解するや不や、不也世尊是人は如來所說の義を解せず何を以ての故に世尊我見人見衆生見壽者見を說くは卽ち我見人見衆生見壽者見にあらず、是を我見人見衆生見壽者見と名く。

衆生の邪見の稠林に入りて般若の性德を味すは人中の四相に依る四相は我見人見衆生見壽者見なり、而して四相內に蟠居すれば法相と非法相との執著之より生ずべし眞空妙有の法門は是を降伏する所の妙藥なり。

須菩提阿耨多羅三藐三菩提心を發する者は一切法に於て是の如く知り是の如く見是の如く信解して法相を生ぜざるべし、須菩提言ふ所の法相は卽ち法相にあらず是を法相と名く。

上に我を空するが故に今は法相を空ぜしむ、法相是を空ずれは法無我の智を成就すべし、此經の大意は人無我の理と法無我の理とを能くするにあり、佛意是に在り、扨て今は此經を註解して此に至る人或は言ひ佛敎の中にて獨り此經は有證を指提して無證に歸せしめ有爲法を拾ひて無爲に歸向せしむ、然れば此等の有證無證眞證假證の說は煩惱を冷却せしむる清涼散たるに過ぎず若し病にして除癒すれば藥は何ぞ用なけんと、然れども眞空妙有の法門は病に對する藥のみにあらず、何となれば眞空妙有の法門は佛心非思量の本面目を發揮する大乘最上乘の法門なればなり、佛心非思量の命脈繫りて此章句に有り、故に必ず究し能く護持すべし、何卽ち佛心非思量の上には加ふべき無し、文殊菩薩曰く佛心は是れ非思量なり

須菩提若し人有り無量阿僧祇世界に滿つる七寶を以て布施せんよりは若し善男子善女人有りて菩提心を發する者此經を持し乃至四句の偈等を受持し讀誦し人の爲めに演說せば其福彼に勝る。

第二十六段化身說法無漏の疑を斷ず前に法身應身非一非異と說く若し非一の說に合同せば化身は衆緣合成の身なり若し非異の說に依れば冥合して法身に歸す然れば化身は自體無し自體無んば佛數を借受して福無かるべし今の佛も化身なればなりと是疑を斷ずる處なり。

無量阿僧祇は此に無央數と翻す數の極多を云ふ十無央數より十無央數は至る二十無央數に至り千無央數に至り千百無央數に至り萬無央數に至り乃至億無央數に至り一億より百億千億萬億無央數に至り然る後無量の無央數に至る然れば無量阿僧祇の數は恆河沙數を超へり。

問ふて云く持經の功德及び人の爲めに一偈を說く功德は何に故に阿僧祇世界に滿つる七寶を施すよりも勝れるや（下）

答て云く寶施は有漏の福報のみ持經の功德及び四句の偈の說法は無漏の功德なればなり故に化身の說法福無きにあらずと。

云何が人の爲めに演說せん相を取らざれば如々不動なり何を以ての故に。

一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀

第二十七段入滅如何が說法するの疑を斷ず卽ち法代の二身は寂定に有り或は寂定を超て說法す其寂定より起つの遠かなる其間の消息は嫌として迫ひ難し吾人も相を取らざれば此に至るべし是を諸佛の淨法界身の自由と云ふ一切諸佛の大圓覺の境界は皆是の如くなりき又慈悲深重なれば名聲普く十方世界に聞ゆるなり故に諸佛如來は大寂定中より起て說法するのみならず出現法來を現じて生死去來球の盤に走るが如くなりき然れば諸佛如來より此世界を見れば此世界は水月鏡像の世界なり何事も應じて跡無きは月の水に浮ぶが如くなりき相を取らざれば此に至る皆是れ如の働きなり故に如と

は相を離れたるを云ふ、相を取らずとは我相と法相とを取らざる義なり、相を取らざれば如の處に至るべし、如の處は眞妄去來の盡くる處乃ち永所住路なり、此經は人をして此處へ到らしめんとす、如に至るには法相有り曰夢幻泡影露電なり、何となれば此太の者は自性無し捕捉すべからず相を離るること當に是の如くすべしとなり、更らに又一方の解釋有り爲法は六事の如し六事は精みとするに足らず、精むべきは眞滿成實の法身のみ此經は是法身を證せしめんとす、是亦義に於て通ず。

佛此經を說きたる長老須菩提及び諸の比丘比丘尼優婆塞優婆夷一切世間天人阿修羅等佛の所說を聞て皆大に歡喜して信受奉行しき。

是は流通分なり正宗終て之に入る正に順なり經の初めに天龍阿修羅等聯れり、是に至て顯る卽ち彩略互顯したるなり、此經是にて終る佛意是の如し。

和譯註解金剛般若波羅蜜經（了）

明治四十三年五月廿日印刷
明治四十三年五月廿五日發行

正價金貳拾錢

著述兼發行者　島根縣能義郡比田村三番邸　芳川祖眼
版權所有
不許複製
編纂兼發行者　東京市芝區西久保廣町拾番地　一喝社　代表者　久内大賢
印刷人　東京市京橋區南小田原町二ノ九　中野鐵太郎
印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目三番地　東洋印刷株式會社
發行所　東京芝區西久保廣町拾番地　一喝社　振替貯金口座東京三三五番

誰でも宇宙の眞理を悟ることが出來る＝頗る奇!!

教界唯一の好雑誌

顧問 日置默仙

# 禪

主筆 新井石禪

月刊雑誌

木人方歌石女起舞

看よ！本誌は複雑なる社會の羅針盤なり……

▲壹部金拾錢郵税五厘▼
▲一年送料共壹圓廿錢▼
▲振替口座東京參參五番▼

讀め！本誌は混沌たる現代の救濟藥なり……

誰でも處世の秘訣を得ることが出來る＝頗る妙!!

購讀申込所 一喝社

東京市芝區西久保廣町拾番地

---

月刊雑誌

通俗平易の德育講話（東京芝區西久保廣町拾番地）

# 佛の教

一部壹錢五厘税五厘
一ヶ年送料共貳拾錢
振替送金は一喝社宛

廉價無比の最好施本（發行所大日本佛教會假本部）

御注意 本誌は毎號主題を設け通佛教主義に基き叮嚀親切然かも平易を旨とし美しき表紙を添へ無比の廉價なれば施本用として最も適當なり施本用は卅部以上一部壹錢二厘百部以上一部壹錢送料は三部毎に五厘

---

日置默仙老師監修
新井石禪老師監修　『禪』雑誌編輯局編纂（忽ち再版）

一喝社最新刊

新撰 禪宗聖典

禪は不立文字直指人心と稱す、されど文殊菩相を排斥せるには非ず、深く宇宙の眞理を透徹し而して後に五千餘巻の大藏經を說かれたれば自ら文義首相に拘泥せず說く一字不說なり、歷代の祖師も又斯の如し、故にや不立文字と稱する禪者ほど多く說き多く書せる者は他にあらざるべし、斯の如く一物に拘泥せず故に禪は佛法の總府なり、今や此の立場に依り、あらゆる佛祖觀師の眞を採り髓を抜きて資參の羅針とし行の手段として此寶典を新選せり觀する處初中後の三部を備へ門と別ち一々細目を揭げ專門家には註解を施へ、囲ほ禪宗の歷史、禪教の綱要、坐禪の方法、禪の活用法をも述べあれば何人も座右の指針とし、活動の標準として須臾も離る可らざる者也、實に一切藏經の綜綱とも名づくべく室内密授の秘書とも謂つべし。

新半截携帯至極便利
紙質最上頁數八百餘
總クロース金文字入
定價金壹圓參拾錢
總革製金文字入
上製定價金壹圓六拾錢
小包郵便料金十二錢

『禪』主筆 新井石禪老師講述（高等施本高評嘖々）

一喝社最新刊

通俗 曹洞禪綱要

本書載する處『序言』『禪宗の起原』『禪宗の相承』『分派の由來』『禪宗の大意』『曹洞禪の特色』『禪の實踐法』『禪の應用』『曹洞宗風の眞面』『佛教中に於ける禪の位置』等の十章に別ち禪の現代日本佛教の狀態より說き起し千三宗四十餘派の分派對立せる所以を精細に述べ、佛教の根本義に及び禪とは何ぞやの問題を解釋し特に知見解の立場と行持綿密の禪風を一擧に喝破して禪の方法、大悟の端的、實地の應用等に就て親切叮嚀を極め何人にても一讀せば自然に禪の妙味を解することを得べし、更に大膽なる見地より自他力宗の眞解を說破し以て現代日本國民の信仰の標準たる合理的實踐的宗教に對する眞面目を發揮して各自に適切なる心身修養の要點を示せる者也

說敍頗る清新菊判形
定價參拾錢送料四錢
施本用十部以上特別
割引委細照會を乞ふ

---

此迄になき禪の組織的教理

四有禪師題字
森田禪師題字
日置老師題辭

# 禪と人生

新井老師校閲
岡田禪東師著
井上哲博士序

（正價一部七拾錢郵税六錢）

禪は名刀也よく人生の亂麻を斷つ

哲學倫理宗教一目瞭然

成程と頷かれる通俗的書物

發行所 東京芝區西久保廣町拾番地 振替貯金口座東京三三五番 一喝社

324
185

曹洞宗兩大本山貫首猊下題辭
曹洞宗大學長秋野孝道老師述

一喝社最新版

禪學眞髓 **五位要訣**

正價金五拾錢
內地郵税六錢
五月下旬製本

五位は禪學の要訣にして佛教の蘊奥なり[illegible]佛法の蘊府なる禪に參ぜんと欲せば必ず五位を參得せざるべからず、而して能く五位を究明し得ば禪の眞髓を體驗し佛教の本體を把住し得るなり本書は[illegible]の内容は(一)[illegible]に於て[illegible]の概要を述べ(二)洞山大師の小傳にして[illegible]の研究に[illegible]於て大師の[illegible]を述べ[illegible]と五位の起原とに及び延いて洞濟兩宗の宗風を述ぶ(三)[illegible]以來の[illegible]を批判し五位の正意を述ぶ(四)道元禪師の相承より日本における大[illegible]を述ぶ(五)五位の[illegible]を分解して[illegible]に述べ近代の學術に合せて之を[illegible]し[illegible]らしむ(七)歸結に於て參學の要路を示し大自在の[illegible]たるべき[illegible]せしめたる稀有の眞書也

「禪」雜誌編輯局編纂

**謚常濟大師**

既刊 頗る好評

壹部拾錢 税二錢
二十部以上八錢
五十部以上七錢
送料二部毎二錢

●口繪及挿畫(一)常濟大師の肖像並御直筆(アート版)(二)今上陛下御諡大師號勅書(三)後醍醐天皇[illegible]勅額(四)後村上天皇御綸旨(五)[illegible](六)[illegible](七)[illegible](八)[illegible]
●[illegible]
●[illegible]

救濟の新方法

皆さんは何か物思ひに沈んで居る人、或は短氣で物言の荒い人、何ぜかう者が解らんだろうと愛相の盡きる人などを御覽になることがわらう、更に日々の新聞紙上を一瞥せらるゝと自殺あり情死あり殺人あり實に悲惨のことで埋まつて居る、誠に氣の毒千萬と申さねばならぬ、斯樣な人々を親切に説得して救濟するが宗教家の本分であります、然し早や病的になつて居る者は唯一時の法話位では却々目的を達すること困難である、斯樣な危場に際し又は豫め防ぐには幸に「禪丹禪寶」の二盤藥があることゆへ、篤志の方は世の爲め人の爲めに廣く配布を願いたい者である、猶は是れが寺門經營の一助となる自利利他の好方便であるから……委細は三錢切手封入で一喝社宛に御照會あれ、既に寺院や信者の方で取次配布して居らるゝ處が百卅餘ケ所あります

7.12.20

324
185

324
185

016436-001-8

324-185

金剛般若波羅蜜教

芳川 祖眠／著

M43
ABC-2305